

悲劇『オセロー』の唯一の喜劇性

清水 英之

序文

若い時にシェイクスピアの原語上演に携わった筆者は役者と演出を経験したことがある。大学の四年間をすべてシェイクスピアに捧げてきた観がある。その筆者が悲劇『オセロー』(*The Tragedy of Othello, The Moor of Venice*)を今の我が国で日本語で上演するとしたら、どのように演出すべきか答えが見つからない。正直に言えば、こんなつまらない劇は上演しない方が良くとまで思ってしまう。なぜつまらないのか、その理由の方が大いに語れてしまうと思われる。それでも、偉大なシェイクスピアをこの悲劇『オセロー』で蘇らせるにはどうしたら良いのか、その問題の答を見出したいというのが今回の論の目的である。

筆者はある着眼点から、四大悲劇のうちの三つまで「悲劇の中の唯一の喜劇性」という論点で論を展開してきた¹。そして、最後に残ったのが『オセロー』である。シリーズもののよう初めから論題を定めて『オセロー』を分析するのは本末転倒のようにも思われる。それでも、シェイクスピアは悲劇の中にも観客にほんの少しだけ癒しを与えてくれていると筆者は信じるようになった。悲劇『オセロー』の中でシェイクスピアが観客に与える癒しを見出そうというのが筆者の目論見である。その癒しを筆者は喜劇性と解釈している。

本学紀要で悲劇『リア王』について議論した時、その結論で、エドガーの最後の台詞に注目した。“Speak what we feel, not what we ought to say”「言うべきことではなく、自分たちの気持を語りましょう」、これがシェイクスピアの観客に対する切実な示唆だと筆者は解釈した。筆者は心理カウンセラーとしての資格を取得してから約20年間来談者と出会ってきた。自分が抑圧してきた感情を言語化するという行為は、フロイト以来の心理療法における重要な課題となっている。現代のカウンセリング技法では自己開示という行為であり、それを共感的に聴くことが傾聴と呼ばれる技術と認識されている。筆者は、この論で、悲劇『オセロー』の上演を考えた時、観客の心を揺り動かす重要な

¹ 本学紀要「悲劇『リア王の』唯一の喜劇性について」(2018)、「悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性—イエス・キリストへの敬信とハムレットの迷い—」(2019)、「『マクベスの悲劇』の唯一の喜劇性—『マクベス』の四幕三場—」(2020)で論じてきた。

要因となるのは、この自己開示と傾聴の技術なのではないかと直観した。この観点から『オセロー』の演出を練る時に、悲劇『オセロー』の唯一の喜劇性を指摘できるように思われる。

この論の第一章では、現代では話題性のなくなった『オセロー』の問題点について論じてゆく。第二章では、ドラマとして重要なカタルシスを醸し出す演出について論じるつもりである。この劇の上演の最後で観客が感じることのできるカタルシスを発見し、悲劇『オセロー』の唯一の癒しとなるカタルシスが喜劇性を含んでいることを指摘してみたい。

第一章 現代日本では問題にされない『オセロー』の諸問題

時代の壁、文化の壁はシェイクスピアの生きていた世界では大いに問題であった事柄を我々の世界ではその問題性を失わせてしまうことがある。実際、『オセロー』という芝居で起こる出来事は今では問題にされることが多くなっていると思わざるを得ない。特に『オセロー』の何が一体問題となるのか、今の日本人には分からないのではないだろうか。以下に、自由に生きられる現代の日本社会では気づかれまいであろう『オセロー』の問題点について考察してみたい。

1-1 オセローがヴェニスのもう一人であるという問題

悲劇『オセロー』が物議を醸し出す問題点の第一は、主人公オセローがもう一人であるということである。この劇の副題は「ヴェニスのもう一人」であり、ヴェニスともう一人に何やら問題がありそうなのである。では、その両者に如何なる問題が含まれていたのだろうか。

まず、ヴェニスについて考察したい。ヴェニスとはシェイクスピアの時代にはヴェネチア共和国であった。この共和国がシェイクスピア当時ヨーロッパの他国とは異質な国であった理由は、信教の自由が認められた国であったことであろう。英国エリザベス朝時代のヨーロッパの国々は宗教的には、カトリックかプロテスタントかで敵対した状況であり、宗教戦争の時代であった。エリザベス一世はスペインの無敵艦隊に勝利した女王でありプロテスタント側の英雄であったが、ローマ教皇がスペイン国王であったことから常に暗殺の危険と直面していた。そのようなキリスト教徒同士の敵対関係にあったヨーロッパにあってヴェニスつまりヴェネチア共和国は異質な存在であった。ヴェニスはカトリックでもプロテスタントでも、そしてユダヤ教でも、自由に信仰することが許された特別な場を提供していたのである。

では、もう一人であることによって何が問題であったのだろうか。第一に、もう一人はイスラム教徒であったことである。もう一人はキリスト教徒ではない、それどころか、

十字軍を想起させる正にキリスト教徒の敵であったのである。また、ムーア人は北アフリカに居住する民族であり、アラブ人であったとも解釈される。この点、オセローが北アフリカに住む黒人として解釈される上演もあるが、必ずしも黒人とは言えない。とはいえ、オセローがキリスト教に改宗していたとしても、ムーア人であることの懸念はイスラム教徒であるという点と白人ではないという点であった。

さて、ヴェニスのもう一人であることに今の日本人はどれだけの問題意識、つまり違和感を覚えることができるのだろうか。ヴェニスは水の都、ゴンドラ、観光の名勝地ぐらゐの認識であろうし、ムーア人に至っては何か分からないと思うだけであろう。だから、日本における『オセロー』上演では、オセローをことさら黒人にしてしまう傾向が強くなると推察される。それは、現代でも黒人差別が日本でもしっかりと認識されているからと言えそうである。しかし、嘗ての『オセロー』のヴェニスのムーア人という問題提起は今の日本には通用しないと思わざるをえない。ヴェニスのムーア人が舞台上に登場してもあまり劇的要素とはならないと筆者には思えてしまう。

1-2 オセローとデズデモーナの結婚という問題

オセローとデズデモーナの結婚は問題が大きかった。この二人の結婚はヴェニスだから許されたと言っても過言ではない。

この劇の第一幕でイアーゴがデズデモーナとオセローの結婚を彼女の父ブラバンシオに密告しに来た時、当時のイギリスの観客はイアーゴの行為に理不尽さを感じなかったであろう。むしろ、娘の結婚は父親の許可が正式に必要であったから、ブラバンシオのようなヴェニスの高官の娘なら尚更であったろう。むしろ二人の結婚は秘密結婚であり、それを知った親が娘を奪った男を投獄しようと試みるのは当時では当然の権利であった。むしろ、罪を問われるのはオセローとデズデモーナの方であると観客は思ったであろうし、イアーゴの怒りは父親の怒りと、また観客の怒りと共鳴し合ったと推察される。当時のイギリスであれば、この結婚は赦されない問題行為であった。

しかし、この結婚はイギリスではなくヴェニスで起こった。ヴェニスは国王などの支配階級の権力が通用しない法的統治が行われていた。ここが、他の王国とヴェネチア共和国の大きな違いであり、シェイクスピアがヴェニスを舞台に選んだのは、オセローとデズデモーナの結婚が可能となるからであろう。本来キリスト教信仰に基づく共同体であれば、以下の二つのイエスの言葉は軽視できない。先ず、マタイ伝 (ST. MATTHEW 10: 34-36.)²を見てみよう。

² 聖書からの引用は、原文は*King James Version*から、日本語訳は筆者による。

34 Think not that I am come to send peace on earth: I came not to send peace, but a sword.

35 For I am come to set a man at variance against his father, and the daughter against her mother, and the daughter-in-law against her mother-in-law.

36 And a man's foes *shall be* they of his own household.

37 He that loveth father or mother more than me is not worthy of me: and he that loveth son or daughter more than me is not worthy of me.

38 And he that taketh not his cross, and followeth after me, is not worthy of me.

39 He that findeth his life shall lose it: and he that loseth his life for my sake shall find it.

34 私が地上に平和をもたらすために来たとは思ってはいけません。私は平和ではなく剣をもたらすために来ました。

35 なぜなら、息子を父と仲たがいさせ、娘を母と、嫁と姑を仲たがいさせるために来たからです。

36 だから、息子の敵は、彼自身の家族の人々となるでしょう。

37 私よりも父や母を愛する者は私には相応しくありませんし、私よりも息子や娘を愛する者も私には相応しくありません。

38 自分の十字架を背負わず私について来る者は私には相応しくありません。

39 自分の命を手にしようとする者はそれを失い、私のために自分の命を捨てる者はそれを手にするでしょう。

次にヨハネ伝 (ST. JOHN 15: 12-21) を見てみよう。

12 This is my commandment, That ye love one another, as I have loved you.

13 Greater love hath no man than this, that a man lay down his life for his friends.

14 Ye are my friends, if ye do whatsoever I command you.

15 Henceforth I call you not servants; for the servant knoweth not what his lord doeth: but I have called you friends; for all things that I have heard of my Father I have made known unto you.

16 Ye have not chosen me, but I have chosen you, and ordained you, that ye should go and bring forth fruit, and *that* your fruit should remain; that whatsoever ye shall ask of the Father in my name, he may give it you.

17 These things I command you, that ye love one another.

18 If the world hate you, ye know that it hated me before *it hated* you.

19 If ye were of the world, the world would love his own; but because ye are not of the world, but I have chosen you out of the world, therefore the world hateth you.

12 わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

13 人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。

14 あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。

15 わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。

16 あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものなんでも、父が与えて下さるためである。

17 これらのことを命じるのは、あなたがたが互いに愛し合うためである。

18 もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。

19 もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。

上記の二つのイエスの言葉を根拠にすれば、お互いに愛し合うデズデモーナとオセローはイエスの掟を実行しているものであり、誰からも非難される罪はない。また、愛し合う関係により親子の縁を切ることも認められる行為であり、イエスの教えを信じるが故の親に対する反逆と理解される。ヴェニスでは権威者の権力は赦されない、法律の下で全ての人々が裁かれる。ここで法律とは日本国憲法のようなものではなく、法律とは聖書であることに気づく必要がある。だが、ヴェニス以外の国、例えばイギリスという王国では彼らの結婚は赦されない。父親の許可なく娘は結婚できないのが常識なのである。つまり、イアーゴが正しいのであって、オセローとデズデモーナは間違っているのである。

しかし、上記の様な理解が現代日本の観客に何かを訴える要因になるのだろうか。愛し合う男女が自由に結婚できる制度の中に生きている我々には、オセローとデズデモーナの結婚に関しても何も問題性を感じることができず、一幕が終わってしまう可能性がある。

以上、『オセロー』の上演でエリザベス朝の観客たちが感じたであろう大きな問題点について考察してみたが、キリスト教対イスラム教の問題も人種差別問題も結婚に関す

る問題も現代の日本人社会ではほとんど問題とならない可能性がある」と懸念せざるをえない。その点で、悲劇『オセロー』が書かれた時代とは違い、今の日本社会は聖書とは違う科学的な法律で人間の自由が実現されている社会であることを再認識できる。

第2章 『オセロー』の悲劇と唯一の喜劇性

悲劇『オセロー』の上演は今の日本では極めて難しいと筆者には思えてならない。筆者が悩むところは、一体この芝居のどこに日本人の観客が悲劇を感じられるのであろうかという深刻な疑問である。この疑問についてこの章では検討してみたい。

2-1 イアーゴの罪

イアーゴは悪魔であり、悪魔の嘘に騙されて主人公のオセローが愛する妻デズデモーナを殺害してしまう場面に観客は悲劇を感じるのだろうか。筆者には悪役に騙されてゆくオセローの愚かさが募ってゆくだけであり、挙句の果てに妻の愛を裏切るオセローに怒りが増して、妻を殺す場面にはただ腹立たしさと愚かさを感じるだけである。その腹立たしさは、エミリアのオセローに対する非難と罵倒に共鳴する。妻を殺す場面では筆者には少しも悲劇性を感じることができない。

イアーゴは悪人である。それは、確かにそうだとシェイクスピア当時の観客も強くそう感じたであろう。また、現代のキリスト教社会でも強くそう感じるであろう。なぜなら、イアーゴはモーセの十戒の幾つかの戒めを見事に破戒するからである。旧約聖書「出エジプト記」(EXODUS 20: 12-18.)を見てみよう。

- 12 Honor thy father and thy mother: that thy days may be long upon the land which the Lord thy God giveth thee.
13 Thou shalt not kill.
14 Thou shalt not commit adultery.
15 Thou shalt not steal.
16 Thou shalt not bear false witness against thy neighbor.
17 Thou shalt not covet thy neighbor's house, thou shalt not covet thy neighbor's wife, nor his manservant, nor his maidservant, nor his ox, nor his ass, nor any thing that is thy neighbor's.
18 And all the people saw the thunderings, and the lightnings, and the noise of the trumpet, and the mountain smoking: and when the people saw *it*, they removed, and stood afar off.

- 12 あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。
- 13 あなたは殺してはならない。
- 14 あなたは姦淫してはならない。
- 15 あなたは盗んではならない。
- 16 あなたは隣人について、偽証してはならない。
- 17 あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。
- 18 民は皆、かみなりと、いなずまと、ラッパの音と、山の煙っているのを見た。民は恐れおののき、遠く離れて立った。

「あなたの父と母を敬え」という戒めはオセローとデズデモーナには不利な戒めであろう。なぜなら彼らはデズデモーナの父を敬わなかったからだ。彼らもモーセの十戒に照らしてみれば立派な罪を犯している。5幕2場では父親は娘を失った悲しみで亡くなったと観客は知らされる。父親を死に追いやった彼ら二人の死も観客には決して悲劇とは感じられなかったであろう。「目には目を歯には歯を」、殺人には死を、がモーセの十戒を犯した罪人への当然の罰なのである。

では、この罰をオセローとデズデモーナに与えたのは誰なのか、それはイアーゴに間違いない。イアーゴは悪魔、悪人と誰もが認識するが、イエスの世界ではなくこの世界から見れば、父親を裏切った罪人に罰を与えた義人と言えなくもない。観客もオセローの愚かさに腹を立てるであろうが、イアーゴの賢さには納得させられてしまうように感じる。もし、それでも、エリザベス朝の観客がイアーゴが悪人であると判断するならば、彼もまたモーセの十戒を犯しているからであろう。イアーゴは「偽証してはならない」「隣人の妻をむさぼってはならない」「殺してはならない」というこれらの戒めを破っているからである。イアーゴは悪魔と判断される。その理由は、これらの罪を罪悪感もなく神の意志を無視して人間の意志によって実行する大胆さと賢さが悪魔の証拠と当時の観客に思われたからであろう。また、今のキリスト教圏の観客ならそう感じるであろう。

しかし、今の日本でイアーゴを悪魔と感じる観客は恐らくいない。彼は今の日本人にとっては日本のドラマに登場するような「ただの悪人」に過ぎないのではないだろうか。だから、彼は最後に罰せられなければならない。観客が期待するのはイアーゴの悪事が明るみになり、退治されることであろう。モーセは言う（EXODUS 21: 12-15）、

12 He that smiteth a man, so that he die, shall be surely put to death.

13 And if a man lie not in wait, but God deliver *him* into his hand; then I will appoint thee a place whiter he shall flee.

14 But if a man come presumptuously upon his neighbor, to slay him with guile; thou shalt take him from mine altar, that he may die.

15 And he that smiteth his father, or his mother, shall be surely put to death.

12 人を死なそうと強打する者は必ず死刑に処せられる。

13 もし人に殺害の意図がなく、神が彼を救い保護する場合は、私は汝に彼が逃れる場を示すであろう。

14 しかし、人が策略を弄して隣人を殺害しようと横暴にも彼に近づく場合は、汝は死刑に処するため彼を我が祭壇からも連れ去らなければならない。

15 父、および母を強打する者は必ず死刑に処せられる。

つまり、神の権威による勧善懲悪を期待し、この劇の観客にカタルシスを感じさせる要因がある。しかし、このカタルシスは気持が良い、つまり天罰が下り悪を懲らす痛快な気持であり、どうしても悲劇とは筆者には思われない。悲劇『オセロー』の悲しみは一体どこに感じられるのであろうか。

2-2 ムーア人オセローの妖術

ブラバンシオは言う、

O thou foul thief, where hast thou
stowed my daughter?

Damned as thou art, thou hast
enchanted her;

For I'll refer me to all things of sense,

If she in chains of magic were not bound,

Whether a maid so tender, fair, and
happy,

So opposite to marriage that she shunned

The wealthy curlèd darlings of our nation,

Would ever have, to incur a general mock,

Run from her guardage to the sooty bosom

Of such a thing as thou, to fear, not to
delight.

お～、穢らわしい盗人め、娘をどこに匿した。

呪われた奴め、娘に魔術をかけおったな。

あの子が魔術の鎖で呪縛されていないかどうか、

あらゆる常識に訴えてみるぞ、

あのように若く、美しく、幸せな娘が、結婚に頑として反対し、立派な身だしな

みの、

羨望的である我が国の資産家たちを拒み、

世間の嘲笑を買うであろうに、親の庇護を離れ、

そのすす汚れたお前の胸に走ったなどと、恐怖すれど喜ぶはずがない。

Judge me the world, if 'tis not gross in sense	お前があの娘に汚れた魔法を用いたとい う考えが
That thou hast practiced on her with foul charms,	非常識かどうか、世間の判断を仰ごうぞ、 動きを鈍らせる薬毒を用いて
Abused her delicate youth with drugs or minerals	か弱き娘に乱暴したのだ。 真相を究明してくれる。
That weaken motion. I'll have't disputed on;	そうに違いない、どう考えても決っておる。 よいな、世間を欺き違法禁制の術を行う
'Tis probable and palpable to thinking.	た大罪人として
I therefore apprehend and do attach thee	お前を逮捕拘引する。
For an abuser of the world, a practiser Of arts inhibited and out of warrant.	さあ、引っ立てろ、手向かいしたら、 容赦はいらぬぞ。
Lay hold upon him. If he do resist,	(筆者訳)
Subdue him at his peril.	(I. ii. ll. 62 – 81.)

ムーア人に我が娘が誑かされるはずがない、ブラバンシオは確信している。ゆえに、ムーア人が黒魔術か妖術(“foul charms” or “arts”)か薬石(“drugs or minerals”)を使って娘を陵辱したのだとしか考えが及ばない。ブラバンシオは最後までオセローをオセローと呼ばない、ムーア人と呼び続ける。この気持は、異民族と異文化に対する自民族中心主義的侮蔑と今なら批判されうる。しかし、この気持は、スペインの無敵艦隊を破った当時のイギリス人の誇りを反映しているようにも思える。カトリックの信仰を捨てた当時のイギリスには無神論も生じ、カトリック側はプロテスタント信仰者を悪魔、魔女と看做し、魔術も信じられ魔女裁判も行われた。ブラバンシオの怒りから出て来る台詞に当時のエリザベス朝の観客は大いに共感したことであろう。

しかし、この疑いに対しオセローは率直に答える、

Her father loved me, oft invited me, Still questioned me the story of my life From year to year, the battles, sieges, fortunes	彼女の父親が私を愛してくださり、しば しば私を招き、 いつもわが生涯の話を年から年へと 数々の戦い、城攻め、幸不幸について尋 ねてくれました。
That I have passed.	
I ran it through, even from my boyish days To the very moment that he bad me tell it; Wherein I spoke of most disastrous chances,	なんと少年の日々から、 話をしろと命じられたその瞬間までの話 を、私は語りました。 その中で、極めて悲惨な危険の数々、

Of moving accidents by flood and field,
 Of hair-breadth scapes i'th'imminent
 deadly breach,
 Of being taken by the insolent foe
 And sold to slavery, of my redemption
 thence
 And portance in my traveller's history.
 Wherin of antres vast and deserts idle,
 Rough quarries, rocks, hills whose heads
 touch heaven,
 It was my hint to speak, such was my
 process,
 And of the cannibals that each other eat,
 The Anthropophagi, and men whose
 heads
 Do grow beneath their shoulders. These
 things to hear
 Would Desdemona serious incline,
 But still the house affairs would draw
 her thence,
 Which ever as she could with haste
 dispatch
 She'd come again, and with a greedy ear
 Devour up my discourse. Which I
 observing,
 Took once a pliant hour and found good
 means
 To draw from her a prayer of earnest
 heart
 That I would all my pilgrimage dilate,
 Whereof by parcels she had something
 heard,
 But not intently. I did consent;
 And often did beguile her of her tears,

海や陸ではらはらさせる事件、
 緊迫した窮地にあつて危機一髪脱出した
 こと、
 横暴な敵に捉えられ、
 奴隷に売られたこと、そこからの救い、
 我が流浪の旅での行動など。
 その話の中には、巨大な洞窟、荒涼とし
 た砂漠、
 切り立つ巨大な岩、岩山の峰、頂上が天
 に触れる山々、
 ここぞと思う時、それが私の語り口ですが、
 人間同士互いに食い合う食人種、すなわち
 アンソロポファジャイについて語り、さ
 らには
 両肩の下に頭の生える異形の人種の話
 をしました。こんな話を聞こうと
 デズデモナーはそれはもう熱心に思われ
 ました、
 ですが、つねに家事で席を外したもので
 した、
 それらを彼女は兎に角出来るだけ早く片
 づけて、
 戻って来ては、食い入るように耳を傾け
 私の話に聞き入ったものです。それを見て、
 私は適切な折りに、彼女から、
 わが遍歴の一部始終を詳細に述べて欲し
 いと、
 望む気持を引き出しました、
 我が遍歴については彼女も小分けには聞いて
 いましたが、
 集中的には聞いていませんでした。私は
 承知しました、
 年少の時に経験した辛い話をした時には、
 何度も彼女の涙を頂戴しました。語り終
 わると、

When I did speak of some distressful stroke That my youth suffered. My story being done, She gave me for my pains a world of kisses; She swore, in faith, 'twas strange, 'twas passing strange, 'Twas pitiful, 'twas wondrous pitiful. She wished she had not heard it, yet she wished That heaven had made her such a man. She thanked me, And bad me, if I had a friend that loved her, I should but teach him how to tell my story, And that would woo her. Upon this hint I spake. She loved me for the dangers I had passed, And I loved her that she did pity them. This only is the witchcraft I have used.	辛い話しの骨折りにと、雨あられの接吻 をしてくれました。 本当に不思議だわ、何と不思議なのかしら、 ああかわいそう、本当にかわいそう、と 心から言ってくれました。 話を聞かなければよかったとか、 天が彼女をそんな男にして欲しかったと 言ってくれました。私に感謝をしてくれ、 そして、彼女を愛している友人が私にい るのなら、 彼に私の話をするように教えてあげてく ださい、 それが彼女への求婚になるだろうと言っ てくれました。 そう言ってくれたので、私は言いました。 彼女は私のへてきた艱難のゆえに私を愛 してくれた、 私はその艱難に涙してくれたがゆえに彼 女を愛しました。 私が用いた魔法はこれだけです。 (筆者訳) (I. iii. ll. 126 - 167.)
--	--

オセローは魔法使いではなく怪しい異人種でもなく、魔術ではなく、ただ彼の生涯を語っただけなのである。そして、年少の頃の「艱難辛苦 (“some distressful stroke”)」を聴いたデズデモーナは、魂を揺さぶられ、「接吻の雨あられ (“a world of kisses”)³」をオセローに返さずにはいられなくなった。つまり、愛さずにはいられなくなったのである。ここで、真実が人の魂を揺さぶり、愛し合うことが実現するという気持は、当時の観客に新約聖書の二つの言葉を想起させたかもしれない。マタイ伝 (ST. MATTHEW 5: 37.) を見てみよう。

³ F1では“kisses”と表現されているが、Q1では“sighes”となっている。デズデモーナの愛情表現を日本人の観客に想像させるにはF1の表現を用いたい。

But let your communication be, Yea, yea; Nay, nay; for whatsoever is more than these cometh of evil.

あなたがたは、はいを「はい」、いいえを「いいえ」と伝えなさい。これ以上の発言は何であれ悪から生じるのです。

上記の言葉は、結局、偽りの証言をしてはいけないという戒めであり、嘘は悪から生じると解釈してよいだろう。聖ヨハネは言う (ST. JOHN 8: 44.)、

Ye are of *your* father the devil, and the lusts of your father ye will do: he was a murderer from the beginning, and abode not in the truth, because there is no truth in him. When he speaketh a lie, he speaketh of his own: for he is a liar, and the father of it.

汝等の父は悪魔であり、汝等の父の欲望を汝等は満たすであろう。汝等の父は初めから殺人者であって、真実に留まらなかった、なぜなら彼に真実はないからである。彼が嘘をつく時、彼は自分自身を語る、なぜなら彼は嘘つきであり、嘘の父であるからだ。

真実を言わない人間は悪魔の子等なのであり、彼らは嘘しか言えない。なぜなら、彼らには真実がないからだと聖ヨハネは言う。この真実を語り合うという交流 (“communication”) が人と人との間に生じた時に、イエスの戒めである「互いに愛し合いなさい」という行為が実現するのであろう。オセローが自分の人生の真実を語り、デズデモーナが大いに共感し、二人は愛し合う結果になった。この結果にはキリスト教徒である限り誰も逆ええないと考えられる。しかし、世間は違う。イエスの言う通り、世間は愛し合う行為のゆえに彼らを憎む。イエスを殺さなければ気が済まないほどの怒りを抱く。その怒りの化身がイアーゴと解釈できる。

しかし、今の日本人には上記の様なキリスト教の背景的知識は役に立たない。聖書の教養がないとオセローは理解できないなどと非難してみても日本の上演では観客の心を動かせないと思われる。しかしながら、真実を語ることによって愛が生じるという期待だけは今の日本人である我々にも理解できるであろう。

2-3 『オセロー』の悲劇

オセローとデズデモーナの結婚が認められると、イアーゴの復讐が始まる。彼の憎悪は1-2で引用したイエスの言葉を思い起こさせる。

If ye were of the world, the world would love his own; but because ye are not of the world, but I have chosen you out of the world, therefore the world hateth you.

世間はイエスの世界に属する人々を嫌悪するという言葉がイアーゴによって徹底的に実行される。世界の支配者になれるという誘惑を退けた四大悲劇の主人公はハムレットだけだった。この点、デズデモナだけがイエスの愛を象徴しているという解釈も成り立つと思う。彼女の最後の台詞“A guiltless death I die.” “Commend me to my kind lord. O, Farewell.”がイエスの十字架上の死と愛を象徴していると確かに説明できる。しかし、キリスト教に馴染みのない日本人の観客の心理に訴えるのは、ひたすらイアーゴの復讐だけなのではないだろうか。そして、観客の心理を揺さぶるのは、その復讐が上手く行くことへの嫌悪と怒り、同時に、騙されてはいけないというオセローへの警告と期待であろうと思われる。

しかし、結果は、オセローがデズデモナを殺害する。この行為を見せられて、観客の怒りは頂点に達し、期待は失望に変わる。観客が感じるであろうこの遣る瀬ない怒りと失望がドラマ『オセロー』の心理的現実ではないかと思われる。舞台上の登場人物ではなく観客の心理に生じるその感情を悲劇と呼べるかもしれない。

2-4 『オセロー』の唯一の喜劇性

この劇の5幕2場の大団円には、観客に二つのカタルシスを感じさせる可能性がある。一つは、勧善懲悪であって、あたかも葵の御紋が登場し、イアーゴという悪人が罰せられる痛快感である。最後にロドヴィーゴがイアーゴに止めの言葉を浴びせる。

O Spartan dog,
More fell than anguish, hunger, or
the sea.
Look on the tragic loading of this bed.
This is thy work.
(ll. 353 - 356.)

To you, lord governor,
Remains the censure of this hellish
villain;
The time, the place, the torture, O,
enforce it.
(ll. 359 - 361.)

このスパルタの犬めが、
苦痛よりも、飢えよりも、海よりもま
こと残虐無比、
このベッドの上の悲劇の重荷を見よ、
これはお前の仕業だ。
(ll. 353 - 356.)

新総督、あなたには
この地獄の悪魔を審判する任がある、
時、場所、その刑、どうか極刑に処す
るように。
(ll. 359 - 361.)

上記のロドヴィーゴの台詞が日本人なら水戸黄門の裁きのように聞こえても可笑しくはない。これがこの劇で観客が感じられるカタルシスとなるだろう。

もう一つのカタルシスは、観客が良かったと感じる喜びに似た感情である。ヨハネ伝には次の様な一句 (ST. JOHN 8: 31-32.) がある。

31 Then said Jesus to those Jews which believed on him, If ye continue in my word,
then are ye my disciples indeed;

32 And ye shall know the truth, and the truth shall make you free.

31 それからイエスは彼を信じたそのユダヤ人たちに言った、あなたたちが私の言葉を信じ続けるならば、あなたがたは真に私の使徒たちです。

32 あなた方は真理を知るでしょう、そしてその真理があなた方を自由にするのです。

『オセロー』の大団円でエミリアは言う、

'Twill out, 'twill out. I peace? No, I will
speak

As liberal as the north; let heaven and
men and devils,

Let them all, all, all, cry shame against
me,

Yet I'll speak.

真実が分かるわ、分かるのよ。私が黙っ
ている？いいえ、言うわよ、

私は北風のように自由なの。天と、人と、
悪魔と

そのすべてが、全部が全部、声を上げて
私を非難しようと、

私は言ってやる。

(筆者訳)

(V. ii. ll. 213 – 216.)

彼女の並々ならぬ決意は真実を語って欲しいと思う観客の心に期待を生むだろう。観客も登場人物たちがイアーゴに騙される愚かさに辟易としている。ここで真実が話されて欲しいと望んでいるはずなのである。だから、観客にはエミリアの決意が印象的に響くであろう。

O thou dull Moor, that handkerchief
thou speakest of

I found by fortune and did give my
husband;

For often, with a solemn earnestness,
More than indeed belonged to such a trifle,
He begged of me to steal't.

IAGO

Villanous whore.

EMILIA She give it Cassio? No, alas, I
found it,

And I did give't my husband.

ばか、ムーアのばか、お前の言っている
ハンカチは

わたしがたまたま見つけて亭主にやった
ものだ。

たかがハンカチ一枚にしてはおかしいほど
真剣に、真顔になって盗んでこいってう
るさくせがむもんだから。

イアーゴ このあばずれの淫売が。

エミリア 奥さまがキャシオーに上げた
だって？とんでもない、わたしが拾って
亭主にやった。

IAGO	Filth, thou liest.	イアーゴ	嘘をつけ、売女。
EMILIA	By heaven, I do not, I do not, gentlemen.	エミリア	いいえ、誓って嘘ではありません、皆さま。ああ人殺しの阿呆、こんな阿呆にどうしてあんなにいい奥さまが。
	O murd'rous coxcomb, what should such a fool		(ll. 218 - 227.)
	Do with so good a wife?		

こうして、彼女が真実を述べると状況は一変する。オセローは最愛の妻を殺してしまった慚愧懺悔の台詞を語り始める。確かにこの懺悔は舞台上のオセローにとって悲劇であるだろう。しかし、観客は果たしてオセローの悔いに共感できるであろうか。むしろ、観客はエミリアの気持と共感し、嘆き悲しむオセローに罵声を浴びせ、溜まった鬱憤を晴らすのではないだろうか。真実が告げられたことによって観客の怒りは解放され、カタルシスを感じることができるように思われる。エミリアは最後に言う、

What did thy song bode, lady?	ねえ奥さま、あの歌がやっぱりでしたねえ。
Hark, canst thou hear me? I will play the swan,	どうか聞いて下さいね、わたしは白鳥になって歌いながら
And die in music. — [Sings] 'Willow, willow, willow.'	死んで行きます。—— [歌う]「柳よ柳、柳の歌を」。
Moor, she was chaste; she loved thee, cruel Moor,	奥さまは貞節でしたよ、ムーア、あなたを愛していましたよ
So come my soul to bliss as I speak true;	残酷なムーア。さ、真実を話したことだし、
So speaking as I think, alas, I die.	わたしの魂は天国に行ける。思いのままを話して死んでいくのです。
	(ll. 239 - 244.)

エミリアは命をかけてデズデモナーのために真実を語った。「友のために自分の命を投げ出すこと、これが最高の愛である」というイエスの言葉が聞こえてきそうだ。この台詞で、観客の心理にある変化が起こる可能性がある。それは、真実を話したことでデズデモナーとエミリアの魂が一つになれた、という融合感である。この融合感は観客が感じることでできる「良かった」という感情であり、二人の魂が救われて天国に行けるという安心感、また、喜びである。これはこの劇で醸し出せる唯一の喜びであり、カタルシスとなる可能性がある。

最後に、もう一つ、喜びのカタルシスに触れたい。キャシオーはオセローに言う、

CASSIO Dear general, I never gave you cause.

キャシオー 将軍、殺害される覚えはありません。

OTHELLO I do believe it. and I ask your pardon.

オセロー 信じているとも、どうか許してくれ。

(ll. 291 – 292.)

オセローはキャシオーを再び信じて、許しを請う。彼らが再び信じ合える友に戻ったことに観客は「良かった」と思えることだろう。ここにも、この嫌な劇に一瞬の癒しを演出上醸し出せると思われる。だが、オセローの質問にイアーゴは答える、

Will you, I pray, demand that demi-devil
Why he hath thus ensnared my soul and body?

ところでその悪魔の化身に聞いてくださらんか、
なにゆえにこの身、この魂にあれほどの

IAGO Demand me nothing. What you know, you know.

毘を仕掛けたのか。
イアーゴ なにを聞いても無駄だ、あん

From this time forth I never will speak word.

たらの知っていることでもう十分、おれ
はこの先もう一言も口をきかない。

(ll. 293 – 296.)

このように真実を語らないという人間の意志がこの悲劇を貫く悲劇的出来事の原因なのであろう。

最後に、オセローは有名な台詞を吐く、

When you shall these unlucky deeds relate,

このような不幸な行いを報告する際に、
ありのままの私を伝えてください。情状

Speak of me as I am; nothing extenuate,

酌量は無用、

Nor set down aught in malice. Then, must you speak

また悪意も無用。ですから、
愚かにも愛し過ぎた人間のことを語って

Of one that loved not wisely but too well;

いただけますように。

(筆者訳)

(ll. 333 – 336.)

この“loved not wisely but too well”という表現をどう解釈すべきなのだろうか。筆者には“loved too well”が従来の解釈で良いのだろうかとの疑問に残る。この意味を「世間に憎まれるほど愛し合った」と解釈できないのだろうか。また、“loved not wisely”を世間の嘘に騙されお互いに真実を語ることを放棄したと解釈できないだろうか。そう解釈す

れば、キリスト教の知識がなくとも、真実を語り合うことが愛し合う結果を導き、嘘を語ることが愛を失う結果となると今の日本人である我々も理解することができると筆者には思われる。そして、数少ない真実を語る場面に感じられる愛し合う喜びが悲劇『オセロー』の唯一の喜劇性となる可能性があると思われ。

結論

『オセロー』は、正直に言えば、筆者にはつまらない劇に思えてしまう。それでも、偉大なシェイクスピアをこの悲劇で蘇らせるにはどうしたら良いのか、その問題の答を見出したいというのが今回の論の目的であった。

『リア王』のエドガーの最後の台詞は、“Speak what we feel, not what we ought to say”「言うべきことではなく、自分たちの気持ちを語りましょう」であった。筆者は、悲劇『オセロー』の日本語上演を考えた時、観客の心を動かす重要な要因となるのは、真実を語ることと愛し合うことなのではないかと直観した。こうした気づきは、筆者が現在カウンセラーとして学んでいるからかと思われる。カウンセリング技術の土台は、受容と傾聴であり、来談者の自己開示を促すことが重要なプロセスであるからである。この傾聴の医療的効果に最初に注目したのはフロイトであった。そのフロイトが彼の精神分析を説く際にシェイクスピアに言及することが非常に興味深い。

この論の第一章では、現代では話題性のなくなった『オセロー』の問題点について論じた。第二章では、ドラマとして重要なカタルシスを醸し出す演出について論じた。その結果、この劇の上演の最後で観客が感じることのできるカタルシスに気づけたと思われる。

そして、真実を語ることと愛し合うという行為の中に悲劇『オセロー』の唯一の癒しとなるカタルシスを発見できたように思える。そのカタルシスが悲劇『オセロー』の唯一の喜劇性だと指摘できたのではないだろうか。この点に焦点を当てた日本での日本語による上演ができないものかと筆者は期待したい。

(本学非常勤講師)